

香川県立文書館 収蔵文書目録第13集

讃岐国大内郡馬宿村

八木家文書目録

平成22年 3月

香川県立文書館

八木家文書目録解題

1 大内郡八木家文書の発見と香川県立文書館への収蔵

八木家文書を世に紹介したのは、藤本正武氏「讃岐国大内郡馬宿村八木家文書について一塩廻船山栄丸・山宝丸の運航の軌跡一」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要第4号』が最初であり、よく発見当初のことを伝えているので、しばらく藤本報告に基づいて述べていくこととする。

八木家文書は平成18年春、八木家の住宅を取り壊し中に土蔵から発見された。取り壊し作業の散水などで水に濡れたり傷んだりしたが、陰干しや修復を経てよみがえった。八木家の当主は大阪在住で、古文書を含む家屋の所有権はすでに隣接する檀那寺西光寺に移っていたので、西光寺および八木家の同意を得て古文書の解読が藤本氏によって始められた。

八木家文書が西光寺より香川県立文書館に搬入されたのは平成21年6月で、寄託が完了したのは同年12月である。

2 八木家

八木家は江戸時代後期に讃岐国大内郡馬宿村を根拠地として回船業を営んだ。屋号は米屋を名乗っている。西光寺の記録では貞享3年(1686)が八木家の初見である。天保期以降の系譜は次のようになって現在に至る。

弁次郎(天保11. 7. 24没、78歳)——伝次郎(明治3. 1. 4没、66歳)——弁次郎(明治35. 3. 3没、68歳)——弁次郎(昭和12. 10. 18没、73歳)——輪太郎(大正7. 10. 30没、21歳)——恒一(昭和36. 5. 5没、69歳)——一郎(平成9. 8. 4没、79歳)——葵一

隣の引田村の庄屋で馬宿村の庄屋を兼ねた日下家の『浦方御用留』のうち「式百石以上江戸廻船書出帳」によれば、弁次郎船(八木家)の初出は文政2年(1819)で、500石積みの船である。同12年になると700石積みと600石積みの2艘となり、天保12年(1841)には920石積み・600石積みと船が大きくなっている。

積み荷は讃岐坂出・阿波斎田・播磨赤穂で仕入れた塩が中心だが、他に高松の砂糖会所から仕入れた砂糖や材木なども扱っている。回漕先は紀州・東海・江戸方面であった。

明治以降になって回船業が振るわなくなると、徳島で菓子屋を営んだり大阪へ出て^{めりやす}莫大小製造業を営んだりしている。また、田畑を持ち、地主経営もしていた。

3 八木家文書の中核をなす回船業関係文書

(1) 塩の売買・回漕に関するもの

回船業関係文書の中で最も多いのは塩の売買・回漕に関するもので、年代は、天保10年から弘化4年(1847)に及ぶ。

仕入先は讃州坂出の北野美屋・川口屋(坂出塩)、坂出新浜の田池屋(坂出塩)、阿州撫養黒崎の中嶋屋・嶋屋、阿波撫養高島の松屋(斎田塩)、備前玉野東野崎浜の多田屋、赤穂城下の竹嶋屋・

渡辺熊次郎・平の屋、与兵衛（赤穂塩、赤穂西浜塩）、駿州沼津江之浦の伊勢屋（竹原塩）など。

売り渡し先は、尾州名古屋の野村屋・知多屋、駿州沼津の伊勢屋、駿州江浦湊の久住忠治郎・源藏、豆州田子浦の柏屋、豆州下田の阿波屋、神奈川青木町の伊勢屋、江戸の塩問屋松本十三郎、江戸南新堀一丁目の伊勢屋、江戸南新堀の清水茂平衛、江戸西新堀の清水屋など。

一度の売買高は最大時で7,844俵に及んでいる（天保14年、53号文書）。金額にして327両余である。

(2)砂糖の売買・回漕に関するもの

年代は幕末期で、砂糖会所から中屋・丸屋を通して、⊗印ということで仕入れている。仕入れ商品の内、蜜は1回に最大で樽13挺（169号文書）、白砂糖は樽8挺（165号文書）となっている。

(3)材木その他の売買・回漕に関するもの

①材木

天保11年、杉6分板・8分板を伊豆下田の中屋より（117号文書）、弘化元年、松2間物を坂出の青木屋より（160号文書）、弘化2年、松8分板を紀州勝浦加納浦の万助より（72号文書）仕入れている。他に杉板・杉丸太・桧皮などの積み込みも見られる（188、212、213、225、335、336号文書）。

②メ粕

弘化4年、メ粕を神奈川青木町伊勢屋を通じて若狭屋へ販売している（80号文書）。にしん・いわし・いいがいなどの粕であることが382、435～440号文書で窺われる。

③薪

天保11年、紀州那智勝浦浦神うらがみの浦神屋より仕入れている（125号文書）。

④白米

天保11年、西浦賀の川津屋より（125号文書）、同年に兵庫の米屋からも仕入れている（125号文書）。そのほか勢州や紀伊勝浦でも仕入れている。

⑤高松藩士の荷物

異色の荷物として、天保13～弘化3年ごろ、江戸屋敷の高松藩士の荷物を高松まで回漕している。勤務の交代に伴うものであろう。「高松様荷物船賃」として記録されている（284、301、328、372、389、390、401～404号文書）。荷物は江戸の塩問屋松本十三郎や讃岐屋が藩士から預かって積み込み、高松に着くと、船から家中屋敷まで配達している。藩士の名前が沢山見られ、中には小夫家おぶも含まれている。受け取った人は、送り状の包み紙に受け取りを書いて渡す仕来りであったことがわかるのも興味深い。

(4)航海に関するもの

讃岐の引田馬宿から出帆して瀬戸内の港で品物を積み込み、紀伊半島を回って江戸まで行き、そして帰帆するまで2ヶ月余りかかっていることが、185号文書や192号文書などに書き留められている。

192号文書では、天保13年寅3月24日に出帆し、坂出で塩を積み、江戸へ行き、5月26日に帰帆している。

185号文書では、弘化元年辰11月22日出帆、2年巳2月9日帰帆となっている。

401号文書では、江戸で積んだ荷物を高松まで運んでいるが、7月10日積み込み、8月高松着となっているので、片道は1ヶ月くらいであったことがわかる。

(5)船の修繕に関するもの

船（木造船）は毎年必ず「船たで」といって船底の外側に着く海草や貝殻を落とす作業をしなければならない。また痛んだ舵などの木部・鉄部を直さなければならない。これらの修繕に関する帳面が「造用帳」と名付けられて多数含まれている。「大工仕切」というのは船大工に仕事をさせたときの支払い文書であり、「鍛冶屋仕切」というのは鉄の部材を修理させたときの支払い文書である。鍛冶屋の例としては兵庫の松兵衛、阿南答島^{こたじま}の万兵衛らの名前が見える。

船たでの場所（請負業者）を見ると、塩飽与島（藤兵衛）、播州坂越浦、兵庫などが知られる。

(6)その他

江戸に塩問屋松本十三郎のいたことは先に紹介したが、185号文書によれば、弘化元年の段階で「休み株」だったのが「是初^{はじ}メテ店開キ」とある。天保12年に株仲間が解散させられた後、やっと再開できたのであろう。天保の改革や経済史の流れとの関係が窺われる。

[付記]

本目録の整理、解題は千葉幸伸が担当し、目録原稿のコンピューター打ち込みは薬師寺徹がおこなった。